**復活節第５主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年4月28日**

**「また聞きたい」**

**詩編16編10～11節**

 **16:10 あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく／あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず**

 **16:11 命の道を教えてくださいます。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い／右の御手から永遠の喜びをいただきます。**

**使徒言行録13章26～43節**

**13:26 兄弟たち、アブラハムの子孫の方々、ならびにあなたがたの中にいて神を畏れる人たち、この救いの言葉はわたしたちに送られました。**

 **13:27 エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めず、また、安息日ごとに読まれる預言者の言葉を理解せず、イエスを罪に定めることによって、その言葉を実現させたのです。**

 **13:28 そして、死に当たる理由は何も見いだせなかったのに、イエスを死刑にするようにとピラトに求めました。**

 **13:29 こうして、イエスについて書かれていることがすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし、墓に葬りました。**

 **13:30 しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです。**

 **13:31 このイエスは、御自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人々に、幾日にもわたって姿を現されました。その人たちは、今、民に対してイエスの証人となっています。**

 **13:32 わたしたちも、先祖に与えられた約束について、あなたがたに福音を告げ知らせています。**

 **13:33 つまり、神はイエスを復活させて、わたしたち子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。それは詩編の第二編にも、／『あなたはわたしの子、／わたしは今日あなたを産んだ』／と書いてあるとおりです。**

 **13:34 また、イエスを死者の中から復活させ、もはや朽ち果てることがないようになさったことについては、／『わたしは、ダビデに約束した／聖なる、確かな祝福をあなたたちに与える』／と言っておられます。**

 **13:35 ですから、ほかの個所にも、／『あなたは、あなたの聖なる者を／朽ち果てるままにしてはおかれない』／と言われています。**

 **13:36 ダビデは、彼の時代に神の計画に仕えた後、眠りについて、祖先の列に加えられ、朽ち果てました。**

 **13:37 しかし、神が復活させたこの方は、朽ち果てることがなかったのです。**

 **13:38 だから、兄弟たち、知っていただきたい。この方による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、**

 **13:39 信じる者は皆、この方によって義とされるのです。**

 **13:40 それで、預言者の書に言われていることが起こらないように、警戒しなさい。**

 **13:41 『見よ、侮る者よ、驚け。滅び去れ。わたしは、お前たちの時代に一つの事を行う。人が詳しく説明しても、／お前たちにはとうてい信じられない事を。』」**

 **13:42 パウロとバルナバが会堂を出るとき、人々は次の安息日にも同じことを話してくれるようにと頼んだ。**

 **13:43 集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者とがついて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みの下に生き続けるように勧めた。**

**私たちは使徒言行録を読み進めて共に御言葉に耳を傾けています。パウロの第一次伝道旅行は、港町ペルゲから160キロメートル北にあり、しかも標高1200メートルのところにあるピシディア州のアンティオキアにある熱心なユダヤ人ユダヤ教徒とユダヤ教に改宗した異邦人が集い神様に礼拝をささげる会堂に進みました。そこでパウロは会堂長に促されて「慰めの言葉」を語りました。それが16節から41節まで続くパウロの説教です。先週はその前半部分の25節までのところを共に読みました。**

**旧約聖書のアブラハムからの物語をパウロは語り、その子孫にダビデ王を与えたことを語りました。そして神様は救い主を与えて下さる約束をしてくださり、その約束通りそのダビデ王の子孫からイスラエルに救い主イエスを送って下さったことを語りました。わかりやすく言えば、旧約聖書が語る救い主はイエス・キリストであるということです。そのイエス様の誕生のところまでを前半部分で語りました。**

**26節からの後半部分でパウロの説教は核心に迫りクライマックスを迎えます。その救い主イエスをエルサレムに住むユダヤ人たちは十字架につけて殺して墓に葬りました。何の罪もないイエス様を十字架に掛けて殺すことで、人々は知らない間に神様の言葉を実現させていたのです。しかし、イエス様は十字架の死で終わりません。**

**30節に「しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです。」とイエス様の復活について語ります。その復活も神様の約束の実現であるのです。死者の中からの復活によって朽ち果てることがないのです。ダビデは人間ですから死によってその肉体は朽ち果てました。しかし、復活したイエス様は朽ち果てることがないのです。**

**そして38節と39節でパウロがこの説教で一番伝えたいクライマックスの言葉を語るのです。**

**「だから、兄弟たち、知っていただきたい。この方による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、信じる者は皆、この方によって義とされるのです。」**

**かつてパウロは熱心なユダヤ教徒でした。ですから律法を厳しく守ることこそが神の前に正しいことであり、神様の前に義とされることだと信じて、パウロ自身も律法を守ると共に人にも守るように厳しく指導してきました。だからこそイエス様の十字架の死と復活を信じることで義とされる、神様の前に正しいとされて罪赦されて救われることを信じるキリスト教を大迫害していたのです。「あんな教えは間違っている。あんな間違ったことを教えて広めているキリスト教はけしからん」とばかりに迫害に命を懸けていたのです。**

**そのパウロがイエス様に出会って、十字架の死と復活の福音を信じて受け入れました。そうしてパウロは信仰によって義とされたのです。義とされるというのは分かりにくい表現ですが、罪が赦されて救われているということです。イエス様の十字架の死と復活によってこんな罪深い私の罪が赦されている。律法をどんなに守っても救われないけれども、イエス様の十字架と復活を信じる信仰だけで罪が赦されて救われている。律法学者でありファリサイ派であったパウロがこんなことを言うのはコペルニクス的転換の出来事です。パウロ自身もこのようにして罪深い自分の罪が赦され救われている、それはイエス様の十字架とさらには復活の出来事なんだ。この素晴らしい出来事を信じなさい。滅んではいけない。復活という出来事はとうてい信じられない出来事だけれども、信じなさい。信じるんだ！**

**そのように聖霊に満たされたパウロは伝道旅行で訪れたピシディア州のアンティオキアで熱く説教を語りました。慰めの言葉を語ったのです。一人でも多くの人がイエス様の十字架と復活による罪の赦しを信じて救われるように。その熱い思いを持って語りました。**

**パウロの説教を聞いていたユダヤ人とユダヤ教に改宗した異邦人からすると初めて聞く話です。未だかつて聞いたことのない話です。彼らの反応が42節と43節に記されています。彼らはなんと次の安息日にも同じ話をしてほしいとパウロたちに願ったのです。来週の礼拝で同じ話をして下さい。というのです。「また聞きたい」と彼らは言ったのです。**

**初めて行った場所で「また聞きたい」と言われる。これって中々ないことです。「難しくてよくわからない」はよくある反応ですし、私も言われることがあります。私は礼拝説教奉仕に今までいろんな教会に行かせていただきましたが、「ぜひ先生には来週も来ていただいて同じ説教をして下さい」と言われたことは一度もありません。**

**実際パウロが語った説教は決してやさしくはありません。旧約聖書の歴史から語り、旧約聖書の引用も多くしていて、説教としては難しい内容と言えます。その決してやさしくはない説教を聞いて、来週も同じ話をして欲しい、また聞きたい、そう思わされるってこれはすごいことだと思います。**

**でも逆に彼らはパウロの話を一回聞いただけですべて理解できたわけではなかったのかもしれません。十分に理解できなかったけれども非常に大切なことが語られているからこそ、来週もう一度同じ話を聞いて理解したいと考えたと言えるのです。そして来週の礼拝には家族や友人や知り合いなど多くの人を連れて来たい、自分一人で聞くのはもったいない、一人でも多くの人に聞かせたい、そういった思いで「また聞きたい」と言ったともいえるのです。**

**来週まで待てば安息日の礼拝でパウロは再び同じ話を語ってくれます。でも、中には来週が待ちきれない人たちもいたのです。その様子が43節の様子です。礼拝が終わってから多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者がついて来て語り合ったとあります。この「ついて来た」という言葉には「つき従う」とか「弟子になる」という意味のある言葉です。つまりパウロの説教を聞いて感銘を受けて来週の礼拝が待ちきれない多くの人たちは、パウロとバルナバに着き従って弟子になることを求めたのです。**

**パウロとバルナバはそのような人々に「神の恵みの下に生き続ける」ように勧めます。神の恵みの下に生き続ける、わかったようなわからないような言葉です。「神の恵みの下に生き続ける」これは元の言葉では「神の恵みに留まる」です。「留まる」なのです。弟子として伝道旅行につき従って神様の恵みのもとに歩んでいくということではなくて、弟子は弟子でもキリストの弟子、キリスト者としてその場所に留まって、それぞれの置かれた場所で神様の恵みに生きなさいということです。アンティオキアの町に留まってその場所でキリストの弟子として神様の恵みの中を歩みなさいということなのです。そして、彼らはパウロとバルナバの言葉どおりアンティオキアの町で神の恵みのもとに留まり、翌週の礼拝で再びイエスキリストの十字架と復活の福音が語られて、多くの人が信仰に入り教会が誕生するのです。パウロとバルナバはイコニオンに行かざるを得なくなりますが、喜びと聖霊に満たされていたキリストの弟子たちはその町に留まり福音の伝道に励んだのです。**

**教会では毎週の礼拝で説教が語られます。何か面白おかしくて会衆席から笑いがどんどん起きるようなお話をしたら、「教会に行ったら面白い話が聞ける」と人が集まるのかもしれません。ただしかしその説教で聖書の言葉が語られずただ面白い話をしたとしたら、イエス様の十字架と復活の福音を一切話さない、「昨日こんな面白い出来事がありまして」のようなただただ面白いお話を牧師がしたらそれは説教ではありません。そして、そんなことが語られたらその場所は教会ではありません。**

**私が東京神学大学を卒業して数年して、同窓生の集まりがありました。そこである教会の担任教師としてお仕えしている同窓生は「うちの主任牧師はどこの聖書箇所で説教しても最後は必ず「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子が信じる者が一人も滅びないで。永遠の命を得るためである」のヨハネ3：16の言葉で終わるんだよなぁ」とぼやいていました。私はその言葉を聞いた時は「そこの教会の人たちは毎回同じ結論で終わって聞き飽きるだろうな」と思ってしまいましたが、自分が牧師として教会にお仕えしていく年月が長くなるにつれて、同窓生の教会の主任牧師の言われていることはとても大切な真理だと思うようになりました。**

**教会の礼拝で毎主日ごとに語られるのは、イエス・キリストの十字架と復活の出来事を通して示される神の愛です。福音です。喜びの訪れである福音です。パウロがアンティオキア教会で語り、「また聞きたい」「来週も同じ話をして欲しい」と言われたことと同じ福音です。その同じ福音を教会は2000年間ずっと大切にして語り続けてきたのです。面白かろうが面白くなかろうが毎週毎週福音が語り続けられ、その福音の言葉によって私たちは新しい一週間を生きる力が与えられて、それぞれの置かれた場所で神様の恵みにしっかりと留まって歩み続けことができるのです。**

**ですから、これからも私たちは教会で毎主日ごとに、同じ話を聞いていきたいと思います。教会が大切にして語り続けて来たイエス様の十字架と復活の福音を聞いていきたいと思います。そして、聞いた福音を周りの人たちに宣べ伝えていきましょう。**